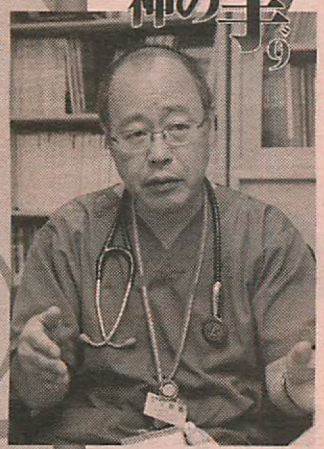

湘南鎌倉総合病院
副院長・
循環器内科部長
齋藤 滋先生 63

心臓カテーテル治療の第一人者

'70年代後半から、心臓カテーテル治療に取り組んできた第一人者が齋藤滋先生だ。

心臓カテーテル治療は主に、狭心症や心筋梗塞の原因となる冠動脈の詰まりや閉塞した部分に用いられる。ステント（金属製の網状チューブ）のついたカテーテルを血管の詰まった部分に挿入し、ステントごと押し広げ、血液を流すというもの。

「当時、日本で心臓カテーテル治療を行っていたのは、僕を含めて7人ほどでした。情報が少なかったので、'81年ごろ、7人で集まって研究会をするようにここから血管内治療が発展したと思います」

そして、大部分の医者が太ももの大腿動脈から挿入するカテーテルを、手首の動脈から挿入する治療法にも、いち早く注目し、取り入れた。

「カテーテルを手首から入れることによって、患者さんの負担が劇的に少なくなります。手術後すぐに、立ちあがり、歩くことができるんです。さらに、大腿動脈は足の深い部分にあるため、周りにある筋肉などの組織に血液が漏れて、血腫ができてもわかりにくく、大量出血して合併症を引き起こす可能性も。手首の動脈は、表面を通っているので血腫の心配はありませんし、血管が細いので大量出血することもありません」

現在、年間1千400例ほど行っており、その治療のほとんどが手首からの挿入だという。また、いままで行ってきた手術はすべて覚えているという齋藤先生のもとに、'03年、最重症患者が搬送されてきた。

「脳梗塞、半身不随、心不全で人工呼吸器を使っていて、ひどい狭心症を起こしている60代の女性でした。心臓外科にバイパス手術をお願いしましたが、状態が悪すぎると断られて。このままでは命を落としかねない状況だったので、手首からのカテーテル治療を。心臓の3本の血管のうち2本が詰まっていましたが、1回の手術で完結させました」

数年後、とても元気になったこの女性と再会したそう。